

# 令和6年度入学試験問題

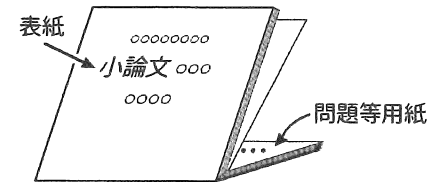
## 小論文（総合科学部） 851

（後期日程）

### （注意事項）

- 1 問題用紙，解答用紙および下書き用紙は，解答開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 この表紙を除いて，問題用紙は5枚，解答用紙および下書き用紙は各4枚である。  
用紙の折り方は図のようになっているので注意すること。
- 3 第1問，第2問の両方に解答すること。
- 4 それぞれの問題に対する解答は，その問題番号の解答用紙に書くこと。
- 5 解答は横書きにすること。
- 6 解答用紙の裏面および下書き用紙に解答したものは採点しない。
- 7 解答開始後，各解答用紙の「受験番号」欄に受験番号をはっきりと記入すること。
- 8 下書き用紙を含め，配付した用紙はすべて回収する。

表紙も問題・解答用紙もすべて  
表面のみに印刷している。



## 小論文 (総合科学部) 851

### 問題用紙 その1

第1問 次の文章を読み、下の問い(問1～2)に答えなさい。

私たちが文章を理解する際、文章に書かれている情報だけで理解しているわけではない。背景となっている様々な既知の情報を知っていて初めて理解できることも多い。逆に、自分の思い込みや偏見が文章の理解を妨げることもある。それを実感してもらうために、つぎの文章を読んでみてほしい。

父親と息子が交通事故に遭った。父親は死亡、息子は重症を負い、救急車で病院に搬送された。運び込まれた男の子を見た瞬間、外科医が思わず叫び声を上げた。「手術はできません。この子供は私の息子なのです」

状況がうまく理解できなかった人が多いのではないだろうか。複雑な家庭環境の人なのではないか、と思った人もいるかもしれない。私自身もこの文章を初めて読んだときは、頭が混乱した。

この文章を読んで混乱してしまうのは、外科医と言われただけで男性の外科医を想像してしまうからだ。この文章の場合、外科医が女性なら自然に理解できる。私たちは、無意識のうちに様々な思い込みをしている。ときには、それがかなり重要な意思決定にまで影響を与えてしまう。

このような偏見が重要な意思決定に与える影響については、アメリカのオーケストラの演奏家の採用試験に関する経済学の研究が有名である。オーケストラの演奏家に要求されるのは、より高い技術をもっていることであり、性別は無関係である。オーケストラにとっても聴衆にとっても、優れた演奏家が採用されることが望ましい。演奏技術の評価はプロであれば的確にできる。だとすれば、男女差別の入り込む余地はなく、演奏能力だけで採用が決まっているはずである。

米国の有名オーケストラで新規に採用された団員の女性の割合は、最近では、35%以上になっている。しかし、かつては、米国のオーケストラの新規団員の女性比率はわずか約5%であったという。この女性比率の拡大をもたらした大きな要因は、音楽大学における女性比率が拡大したことではなく、採用試験を演奏者の性別も含めて誰かわからない状態(ブラインド・オーディション)で行うようになったことだと研究者らは採用データから明らかにした。明確な実力差が比較的容易に判断できる職種であっても、候補者の性別がわかる場合には、男性を採用する比率が高かったのだ。

このような無意識の男女差別によって被害を受けているのは、なにも女性演奏家だけではない。これによって良質な音楽を聴くことができない聴衆はもちろん優れた演奏ができないオーケストラもともに損失を被っているのだ。

偏見による差別の問題は、2018年に明らかになった医学部の入学試験で女性受験者が不利な扱いを受けていたことにもあてはまる。大学側が、女性受験生に対して不利な扱いをした理由として経済合理性が主張されることがある。女性医師が出産・子育てで労働時間が短くなるため、男性に比べて医師の生産性が低くなるというのだ。訓練費用を企業が負担する場合に、勤続年数が平均的に短いと予測されるグループに対して採用差別をすることは、経済学では統計的差別として知られている。

(中略)

女性医師がいると生産性が下がるから、医学部の入学段階で、女性を不利にするのは合理的だ、という意見はいかにも説得力があるように見える。しかし、よく考えてみると、このロジックには無理なところが数多くある。女性医師に対する見方は、オーケストラの演奏家の採用試験の際のような偏見に基づいているのかもしれない。かつては、オーケストラの演奏家は男でなければならないという偏見が強かったために、女性比率が低かった。それがブラインド・オーディションに変わって、女性比率が

(その2に続く)

## 小論文 (総合科学部) 851

### 問題用紙 その2

(その1より続く)

上昇し、オーケストラの演奏レベルの向上につながった。世界各国で、医師の女性比率が低い国は少ない。女性医師比率はOECD(経済協力開発機構) 関連国の平均47.3%に比べ、日本は20.3%と半分以下である(2017年)。日本の女性医師だけ生産性が低いということを正当化することは難しい。

無意識の偏見によって引き起こされている問題は、組織的・制度的に意識的な対応をしなければ解決できない。そのためには、データをもとに、合理的に説明できない格差を明確にしていくことが必要だ。医学部の入学試験における女性受験者差別の実態が明らかになったことは、このような偏見による差別を解消していくことにつながるだけでなく、より生産性が高い社会にしていくための第一歩である。

リーダーが男性ばかりだと、リーダーになるのは男性の役割だという無意識のバイアスが私たちに埋め込まれていく可能性がある。リーダーを選ぶ際に、選択の自由さえ確保しておけば、自ら選んで決めているのだから問題ないはずだ、と私たちは考えてきた。しかし、その選択には、自分でも気がつかない思い込みが影響しているかもしれないのだ。思い込みによって最適な選択ができず、その被害を受けるのも私たち自身だ。

どうすれば改善できるだろうか。無意識のバイアスが生じないように環境を変えていくことが重要だ。しかし、男性外科医が大多数だという状況は急には変えられない。

一つの方法は、無意識にバイアスのない選択肢を選べるように環境を変えていくことだ。2022年4月施行の育児・休業法改正もその一つだ。本人または配偶者の妊娠・出産を申し出た労働者に対して、育休制度に関する説明と、育休取得意向確認を個別に行うことが義務付けられた。これは、男性は育休を取らないという無意識のバイアスを緩和する。もっと有効なのは、男性の育休取得を原則にすることだ。つまり、デフォルトと呼ばれる意識しないで選ぶ選択肢にバイアスがないものを設定するのだ。

女性リーダーが少ないことの一つの理由は、女性は競争に参加することを嫌うので、昇進競争にも参加しないというものだ。行動経済学の多くの実験でも、女性は男性よりも競争を好まないとされている。しかし、女性が競争を嫌っているのではなく、無意識のバイアスが原因だという研究がある。競争を選ぶという設定ではなく、競争することがデフォルトで、競争しないことも選べるように設定すると、女性は男性と同じように競争を選ぶようになるというのだ。少し設定を変えることで、私たちは無意識のバイアスを克服できる。

出典：大竹文雄(2022)『行動経済学の処方箋：働き方から日常生活の悩みまで』中公新書，16-23頁。必要に応じて文章を一部省略し，表現を改めた。

問1 本文を要約しなさい(100字以上150字以内)。

問2 下線部「無意識の偏見によって引き起こされている問題」の具体例をあげて、その問題の改善策や対処方法に関するあなたの考えを述べなさい。ただし、本文中で述べられている具体例は除くものとする(400字以上500字以内)。

## 小論文 (総合科学部) 851

### 問題用紙 その3

第2問 次の文章を読み、下の問い(問1～2)に答えなさい。

チェコ映画は日本でも公開されることがある。イジー・メンツェル監督『スイート・スイート・ビレッジ』や『英国王給仕人に乾杯!』、ヤン・フジェベイク監督『この素晴らしき世界』などは日本でもDVD化された。中でもヤン・スビェラーク監督『コーリヤ 愛のプラハ』は東京国際映画祭の東京グランプリをはじめ、一九九七年にはアカデミー賞最優秀外国語映画賞を受賞したので、広く知られている。

(中略)

わたしの注目は、チェコ人ロウカとロシア人コーリヤの間で交わされる会話である。スラブ人同士がチェコ語とロシア語で適当に話を進めながら、理解し合ったり、反対にさっぱり分からなかったりする。系統の近い二言語は通じる部分も多いが、やはり別言語であり、その微妙な隙間が興味深い。チェコ映画の最高傑作とまでは思わないが、好きな映画なのでくり返し観ている。

ここで日本留学の経験を持つ大学院生が、流暢な日本語で質問した。

『『コーリヤ』は社会的背景などが難しいから、外国人には分からないといわれていますが』

わたしはこの質問が不思議でならなかった。

そういう君たちだって、社会主義時代にはまだ生まれてもないでしょ？

自分が生まれる以前の事柄について知識があるのは教養だと思う。わたしと同世代がいしだあゆみの『ブルー・ライト・ヨコハマ』を覚えていたところで「懐メロ」にすぎないが、今の大学生が知っていたらちょっとしたものだ。同じ流行歌でも明治・大正期に活躍した添田唾蟬坊の『まっくろけ節』となれば、完全に歴史の教養である。

生まれる前と並んで、自分が身を置いていない地域の知識があることも教養ではないか。日本で生まれ育ち、留学経験のないわたしでも、本などを通して旧ソ連やチェコスロバキア、ユーゴスラビアの事情を学ぶことはできる。

つまり自分が直接には経験していない四半世紀前の社会的背景を知るための条件は、二十代のチェコ人だろうが、五十代の日本人だろうが、たいして変わらないのである。中でも社会的背景を調べることはそれほど難しくない。どんなに昔のことでも、どんなに遠い地域のことでも、情報はいくらだってある。

いや、そもそも調べなくたっていいのかもしれない。あらゆる言語作品には分からない箇所がつきものである。小説でも映画でも、完全に理解することなんて誰にもできない。それでも充分に楽しめる。

(中略)

藤枝・グトワ・エカテリーナさんは、わたしがラジオでロシア語講座を担当したとき、パートナーとして一緒に出演していただいた。彼女はロシアや日本の大学でロシア語・ロシア文学を専攻し、現在はあちこちの大学でロシア語を教えながら、日本文学の翻訳にも携わっている。

彼女の日本語は美しい。現地でことばを覚えた外国人の中には、巧みだけどあまりに口語的すぎたり、それが行き過ぎて乱暴なことば遣いをする人もすくなくないのだが、彼女の穏やかで正確な日本語は、どんな人にもよい印象を与え、聞いている人を魅了する。

それなのにある日、放送収録前に昼食を取りながら打ち合わせをしていると、グトワさんは突然こんなことをいい出

(その4に続く)

## 小論文 (総合科学部) 851

### 問題用紙 その4

(その3より続く)

したのである。

「わたしの日本語はまだまだです」

えっ、急にどうしたの？

「読書をしていたのですが、ちっとも理解できません」

いったい何を讀んだのですか？

「三島由紀夫です」

……

(中略)

三島の日本語は美しい。

言語学では言語の美醜を問わないことになっている。ある言語の美しさを褒め称えれば、その反対に醜い言葉を決めつけて軽蔑することに繋がる。民族主義的な評価は、言語に対する冷静な判断の妨げ以外の何物でもない。だが物語の読者は、個々の作家の文章に対して自由な感想を持っている。わたしだって『金閣寺』の日本語は美しいと感じる。

果たして外国人もそう感じるのか、三島作品の外国語訳は非常に多い。なかでも『金閣寺』はとくに人気だ。手元には英訳のほかにロシア語訳もチェコ語訳もある。ただし数多い三島作品が満遍なく紹介されているかといえばそうでもなく、『金閣寺』のほかに『仮面の告白』などが多くの言語に訳されているが、わたしが気に入っている『美しい星』は外国語訳が見当たらなかつたりする。外国語に翻訳される文学作品は、同じ作家であっても限定されるものらしい。

三島由紀夫と並んで、外国の日本文学研究者が好むのが谷崎潤一郎である。長編小説『細雪』もまた、多くの外国語に訳されている。

わたしが『細雪』にはじめて触れたのは、例によって映像からだった。市川崑監督『細雪』(一九八三年)の映像は美しい。同監督による横溝正史原作のミステリー映画でおどろおどろしい演技をした俳優たちが、そこでは全く違った優美な姿を見せているのが対照的だ。さらに日本の伝統的な四季が艶やかに描かれているのを目の当たりにすれば、外国人もまた、わたしと同様に原作に触れてみたいくなるだろう。

だが読んでみれば、『細雪』は想像以上にモダンな面を持つ作品であることに気づく。蒔岡家の四姉妹は西洋料理店で食事し、夜はチーズを肴に白ワインを楽しむ。次女・幸子や三女・雪子はフランス語を学び、次女の夫・貞之助は英語を話す。そして何よりも、外国人との付き合いが頻繁に描かれる。

(中略)

カタリナ・キリレンコは四女・妙子の人形作りの弟子である。ロシア革命後に亡命してきたキリレンコ家は、妙子の仕事部屋代わりのアパートの近くに住んでいるのだが、あるときカタリナが訪ねてきて弟子入りする。それがきっかけとなり、妙子、幸子、貞之助の三人がキリレンコ家に招待される。

(中略)

読みながら、わたしには突拍子もない考えが浮かんだ。キリレンコ家の人々はウクライナ人なのではないか。

根拠も多少はある。まずキリレンコのように「～ンコ」で終わる名字は明らかにウクライナ系である。では「カタリナ」はどうかといえば、これはロシア語でもウクライナ語でもない。ロシア語ではグトワさんのように「エカテリーナ」とす

(その5に続く)

## 小論文 (総合科学部) 851

### 問題用紙 その5

(その4より続く)

るのが一般的である。一方、ウクライナ語では「カテリーナ」という。音引きはともかく、ウクライナ語のほうが近いではないか。もっともロシア語にも口語では「カテリーナ」という形があるのだが。

(中略)

ちなみにキリレンコ家の老婆は非常に教養が高いものの、だいぶ奇妙な日本語を話す。実をいえばこれもまた、いかにもロシア人やウクライナ人らしい日本語の癖が反映されているのだが、ここで詳しく分析することは控えたい。とはいえ、その部分はロシア語訳『細雪』ではどうなっているかが気になった。そこで該当箇所を読んでみたのだが、すべて標準ロシア語で、しかも引用符を使って会話を再現することなく、間接話法で訳されていた。

いかに三島や谷崎が面白くても、外国人がそれを日本語で読む必要は必ずしもない。『金閣寺』にせよ、『細雪』にせよ、すでにさまざまな言語に訳されている。その訳者だって、スラスラ読んだとは限らない。すくなくとも訳すときは、ことばを慎重に選び、当時の時代背景も考慮しながら、緻密な作業を続けたのではないか。だったらその成果を、ありがたく享受すればいいのである。『美しい星』のように、翻訳が見つからなければ話は別だが。

(中略)

『細雪』の貞之助がカタリナの兄からウロンスキーを紹介された際、ウロンスキーといえば『アンナ・カレーニナ』にも出てきますねと話す場面がある。トルストイを読んでいる貞之助に感激するウロンスキーに、カタリナの兄は、日本人はみんなトルストイもドストエフスキーも読んでいると説明する。これでいいではないか。大切なのは何語で読むかではなく、何を読むかである。

出典：黒田龍之助 (2018) 『物語を忘れた外国語』新潮社, 27-29 頁, 47-54 頁。必要に応じて文章を一部省略し、表現を改めた。

問1 教養についての著者の考えを要約し、それに対してあなたが考える教養とはどのようなものか説明しなさい (200字以上 300字以内)。

問2 日本を含む多くの国々で非英語言語の授業が学校教育に組み込まれているが、英語が実質的に国際共通語となっている現在、非英語言語を学ぶことに意味はあるのだろうか。本文の内容をふまえて、あなたの考えを述べなさい (500字以上 600字以内)。



受験番号	第	番
------	---	---

小論文 (総合科学部) 851  
解答用紙 その2

第 1 問

問2

	5	10	15	20	25	
1						
4						100字
8						200字
12						300字
16						400字
20						500字

(25×20=500字)

小計	点
----	---





受験番号	第	番
------	---	---

小論文(総合科学部) 851  
解答用紙 その4

第2問

問2

	5	10	15	20	25	
1						
4						100字
8						200字
12						300字
16						400字
20						500字
24						600字

(25×24=600字)

小計	点
----	---